

清泉ファミリークリスマスの集い

日時：12月15日（土）
13：30～15：30
13：00開場

場所：ホクト文化ホール
中ホール

テーマ：私の兄弟であるこの
もっとも小さい者の一人
にしたのは、わたしにして
くれたのである。
(マタイ25・40)

今年も清泉ファミリークリスマス集いの左記のように行われます。清泉ファミリーの一員として、清泉中・高、外郭団体（同窓会・保護者会等）との繋がりをますます強くするために、こぞつて参加しましょう。この集いは、市民一般に開かれていません。清泉を知らないお友達、受験を考えている小学生、中学生、高校生、家族などを誘ってお出かけください。特に、清泉高校の卒業生は、懐かしい先生や後輩、友達に会えるよいチャンス、積極的に参加し、近況を報告して試してみたいかがでしょう。

カトリック センター便り

第4号
平成24年
12月12日

今月のみことば

ひとりのみどりごが
わたしたちのために
生まれた（イザヤ9・5）



クリスマスイヴのミサに与かってみたい人

教会のクリスマスのミサに与かってみたいと思ったことはありませんか。クリスマスの前夜のミサの時間は、上の表の通りです。長野市の権堂駅の近くにある長野カトリック教会のクリスマス・イヴのミサの時間は、午後七時からです。参加してみたいと思う方は、どうぞお出かけください。もし一人では心細いという方は、シスター、人間学・キリスト教概論の授業の担当者あるいは、M館二階事務室の三ツ橋さんに申し出てください。家が遠くて帰る交通手段がなくなるとい方は、聖心館に五人までなら泊まるすることができます。詳細は申し込み後に連絡いたします。

北信地区カトリック教会のクリスマス・ミサの時間

教会 電話	長野教会 026-232-6949	篠ノ井教会 026-292-0549	須坂教会 026-245-2353	中野教会 0269-22-3503
12月24日（月）	午後 7：00	午後 6：00	午後 6：00	午後 6：00
12月25日（火）	午前 11：00	午前 10：00		

清泉女学院大学開学10周年を記念して
長野駅構内に設置されたクリスマスツリー



設置期間：11月30日～12月25日まで

ご質問・ご意見・応募・問合せ先：シスターズ、三ツ橋、掲示板の封筒

カトリックと私 (2)

—なぜ、いま、自分はここにいるか—

学長 吉川 武彦

カトリックと自殺

長いことカトリックでは自殺をタブー視してきたように思う。それが私の誤解でなければいいのだが、ごく最近のカトリック関係のニュースレターに自殺に関する記事が載っていた。それを読むと、いまカトリックは自殺に対する考えを変えようとしているように思われた。また、この度入手したカトリック関連の書物に抛れば、カトリックとしても自殺防止を図らなければならないという積極的な意志を感じ取ることができた。

私はこの自殺に“きわめてしつこく”関わって来た。その理由は、私が学生運動をしていたとき、学生運動仲間から数多くの自殺者が出たことによる。その学生運動の大きなテーマは「反安保」、つまり日米安全保障条約の改定に反対することをテーマとしていた学生運動であった。この運動は「反戦運動」でもあり「反核運動」でもある。わが国は敗戦とともに大きく舵取りが変わり、「民主主義」を核とする「戦争をしない国家」になった。いえ、なつたはずだった。しかしながら世界的には東西対決が先鋭化して、米国を中心とする自由主義国家と旧ソ連を中核とする東欧諸国との対立が激化し、まだ占領下にあったわが国は日米安全保障条約を締結することで自由主義国家の

中に取り込まれた。それは言い換えれば「戦争をしない国」から「戦争に荷担する国」への転換であったと言うことができる。それはまだわが国は日米間ですら講和条約の締結に至っていないかつたときであったからやむを得ないとしても、わが国が日米講和条約を結んだあとにおいて日米安全保障条約を改定しようとする動きが強まることは、わが国の方向が、戦争をしない国から戦争をする国に大きく変わることにつながると考えて、私はこの「安保闘争」に参加した。その闘争仲間と言っている学生から自殺者が多く出たのである。

すべてが学生運動に関わった学生の自殺とは言えないまでも、1958年のわが国の自殺者総数、2万5000人のほぼ半数である1万2千500人ほどは30歳未満である。この20歳代以下の自殺者であったことからもおわかりいただけるように、学生運動仲間からも多くの自殺者が出た。私が自殺を終生のテーマとしようと決心したのは精神科医になってからではない。多くの運動仲間を自殺で失った私の、自殺することでわが国が向かう方向の間違いを指摘しようとした彼らへの「弔い合戦」として始めたものである。

内山神父さまとの出会い

こうして私は自殺と深く関係しはじめたが、その頃のカトリックは自殺をタブー視し、自殺者は天国に行けないと言っていた。もちろんそれは私の伝聞に過ぎないが、私自身はなぜ自殺者は天国に行けないのかという疑問を密かに抱いていた

し、こういう考え、思想と言うべきか宗教上の信念と言うべきか、その考えと私との間には深い溝があった。その私に縁談が転がり込んできた。その女性、いまの私の家内は、カトリックの信者であるという。そのことを知った私は、この縁談を進めるかどうかについて、彼女に深く関わってきつた神父さまと話し合う必要を感じた。

後に共同生活を始める女性、いまの家内は、福島県浪江町の出身、双葉町にある双葉高校を出て東京薬科大学に学んだ。その通称「東葉」で出会ったのが内山神父さまであったという。この神父さまがなぜ東葉に入りに入っていたのかはよくわからないが、少なくとも家内の親しい友人のなかから数多くの信者が誕生していることから考えてみても、なかなかの人物であることがわかる。

後に知ることになるが、同じ東葉の1年上には、彼女の従姉妹がおり、この方がカトリックの信者であった。この従姉妹とは、いま、私も深くおつきあいを願っているが、彼女は鎌倉の清泉女学院小・中・高等学校の出身である。そしてその従姉妹と東葉で同級であったのが、本学の前代学長、シスター宮澤である。シスター宮澤と家内とは1学年家内の方が下ではあるが、バレー部仲間であり「同じ釜の飯を食った」友人である。もちろん、このことは後になって知ることになったのだが。

なお、家内に抛れば、バレー部仲間であったシスター宮澤は、まだもちろんシスターではなく、いえ、カトリックの信者でもなかったという。脇道にそれたついでと言っては何だが、家内に言わせれば「宮ちゃん（これがその頃の宮澤紀江さん

の呼び名という)がまさか修道院に入るとは想いもしなかった」と言うことのように、這いつくばるようにしてバレーボールを受けていた姿からは想像もできないと言っていた。

さて内山神父さまの話に戻る。私が神父さまをお訪ねしたのは東京・練馬区にある関町教会であった。どちらかというとこの地域は新たに開発されたところで、きちんと区割りがされている住宅地のなかに教会はあった。入るとすぐ左手に神父さまのお部屋があり、右手は教会に続いていた。

お訪ねを入れるとすぐに神父さまが出てこられた。家内、といつてもまだ結婚はしていなかったが、家内は旧知の間柄なので久闊の言葉もそこそこにお互いのこれまでと知人や友人の話で盛り上がった。その話しづりを聞きながら、神父さまの人物診断をしていたのは、私がすでに精神科医としての目を光らせていたと言うことも知れない。

神父さまと家内の話が一段落したとき、私は「すでにお手紙を差し上げましたように、本日は、私がこの女性と結ばれることになるかも知れませんが、信者でもない私が信者である女性と結婚することについての意見、いえ、お許しが得られるものかどうか、お訪ねした次第です」と切り出した。このあと、この女性との出会いの話、彼女との交際を始めたいきさつ、そして結婚を考えている自分について語った。この話のハイライトは「私は神が存在するか否かは考えていません。神の存在を信じていないという意味ではなく、もちろん神の存在を信じているひとがおいでになることは

十分に理解しているつもりですが、私自身が神の存在を信じているわけではありません」と言うことにあった。

私は、神父さまに「私が信じているのは、『人』そのものです。人を信じられなければ精神科医は務まりません。人は変わります。人の影響を受けて変わりますし自分で自分を変えることもできません。精神科医は、自分で自分を変えることができるように道をつけることはします。人を変えようとするのではなく、その人が自分の生きる道を変える必要があると気づいていただくことはします。変えようとはしません。変えるのは自分自身だからです」と一気に話した。さらに私は、かつて学生運動をしていたこと、その目的や目標が何であったかについても語り、この国の行く末についても語った。神父さまは、ただ、黙ってそれをお聞きになるだけであった。

「というわけで、私はこの女性と結婚することを考えていますが」と言葉が続け、「私の考えについてはこの方にお話をしてきましたが、結婚しようと考えたときに自分に誓ったのはこの人を自分の一生を掛けて守るということでした。これは私が自分に言いかけたことですが、カトリックの場合はどのような約束ごとがあるのでしょうか」とお聞きしました。するとこの神父さまは「いま、あなたのお考えはしっかりと聞きしたつもりです」と話し始められ「たった一言でいえば、あなたが言われたように、この方を一生を掛けて守って下さればいいのです。カトリックは、それ以上のこともそれ以下のことも申しません。俗な

ことでいえば、あなたに信者になってほしいなどとは申しません」と話された。

私はそのお言葉をお聞きして「もちろん、一生を掛けてこの方を守ります」それはお約束します。もしもそれでよろしいというのであれば、この方はカトリックのつとめて式を挙げたいと申したいですが、お許しただけですか。もとより私はこの方の望み通りにしたいと考えています」といいますと、神父さまは破顔され、「もちろん喜んで」といつて下さいました。その上で、「この関町は東京の外れですし、ここでお式を挙げるとすると参加して下さる方に負担がかかります。ご主人、いえご主人予定者のあなたは、附属の出だとお聞きしましたから、本郷教会でお式を挙げたらいかがでしょうか」とまでいつて下さった。「本郷教会には、私もわがママが利きますから」ともいわれにやつとされた。

この神父さまなくしては私はいまの家内と結ばれなかったかも知れないし、その後の精神科医としての道も開けなかったかも知れない。神ではなく『人』を信じればいいとまで言い切つて下さったこの神父さまこそが、いまの私のバックボーンになっている。ちなみに内山神父さまとのこの出会いのとき、私は「なぜ、カトリックでは、いえキリスト教では、自殺をタブー視するのですか」とストレートにお聞きした。そのお答えを書くとき長くなるが、「いざ、カトリックも自殺に関する考え方を変えなければなら

ないと思う」と言われたことを加えて



おこうと思う。

子どもを4人授かって

このようなわけで結婚式は東京都文京区にある本郷教会で挙げ、本郷3丁目から谷を一つ越えたところの仲町に近いところでささやかな披露宴をした。仲人を務めて下さった千葉大学精神科教授の松本 胖先生ご夫妻と友人知人数人および家族だけのささやかな宴であった。生活の根拠も本郷3丁目から歩いて10分ほどのところ、地番は北区だが駒込と接するところに決めた。家内が間借りをしていた家のすぐ近くにあるたばこ屋さんの屋敷内別棟である。真ん前が田端第七小学校、その隣は大龍寺でここにはその道で有名な方、たとえば俳人正岡子規、陶芸家板谷波山などのお墓があった。その数軒隣は大木に囲まれた上田端八幡神社である。その神社のお隣は家内がお部屋を借りていたお宅、私たちが住んだ家をお借りするときはこのお宅のお世話であった。

お借りできた家は先のお寺に向き合う形で門がある1軒家であるが、元々隠居所としてたてたとされるように二間で、内風呂もなかった。そこに廊下をやや広くして一間をつくり、台所の先に風呂場をつくって住むことにした。長女と長男、さらに次男もこの家に住んでいるときに生まれた。長女と長男は年子(としご)、3年空いて次男を得たが、この子もこの家に住んでいるときに生まれた。長女は生まれたときに幼児洗礼を受けた。男の子は、自分で分別がつくようになってから受けなければならないという家内の言葉にしたがって洗

礼は受けていない。

私は千葉大学大学院精神神経医学専攻の院生として大病院で学ぶ一方で、教授の指示に従い群馬県渋川市にある財団法人大根会榛名病院に精神科医として勤務を開始、月曜から木曜日までは大病院、金曜日から日曜日までは群馬県の榛名病院で過ごすというスケジュールをこなしていた。駆け出しの精神科医として学ばなければならぬが、医学部の大学院は4年間なのでこの間に学位論文を書き上げなければならぬ。したがって、まさに「月月火水木金金」の休みなしの生活をしていたが、それはそれなりに楽しかった。日常的に教会に足を運ぶことはほとんどなかったが、クリスマスともなれば家内とあちこちの教会に行き、その荘厳さに触れた。

駒ヶ根に転動をして

1965年、昭和40年10月、まだ大学院院生である私がこの榛名病院の管理職、副院長に任じられてしまった。院長は父と同じ1901年、明治34年生まれ、亀井清安先生、お酒の好きな先生であったが俳人でもあり「健奴(けんんど)」と名乗っておられた。私も俳句をつくっていた関係でかわいがっていた。私の俳号は「游子(ゆうし)」である。院長の亀井先生とは仕事の上では姓を呼び合うが、仕事を終えて二人になると「健奴」と「游子」の付き合いになった。ある夏に千葉大学の俳句仲間である「やはぎ会」の面々を迎えて、渋川から伊香保温泉、また万座温泉から草津温泉、さらに浅間に抜けるという吟行を行

ったが、このすべてに亀井先生は同行して下さった。

1966年、昭和41年3月に学位をいただき、大学の方は無給医局員となって外来を担当し、一般の精神科外来のほか特殊外来として子どもの外来を開設した。群馬県の榛名病院では、大学院生のときに病院管理職、副院長となり亀井先生をサポートする役割を担うことになった。医師免許証をもらってまだ3年ほどを経たときである。亀井先生からは全権を委任され「自分が入院したくなる精神科病院づくり」をめざし病院改革を始めた。そこへ降ってわいたような教授命令で長野県立駒ヶ根病院に転じることとなった。1968年、昭和43年のことである。

それまでの駒ヶ根病院は名古屋大学から医師が派遣されていたが、長野県となにやらトラブルがあったらしく、急遽、医局員は総引き上げをすることとなったからということだった。長野県と千葉大学は浅からぬ縁があり、このときも長野県からの要請があつて千葉大学から医師を派遣することになった。私が駒ヶ根病院に赴任することになったいきさつはこうした背景があつたが、派遣を命じた教授が当時の言葉で言う「医局解体闘争」のあたりで、人事権を放り出してしまった関係で、私は駒ヶ根にとどめ置かれることになってしまった。(2012年12月10日 続く)